２．フランスにおける柔道文化の現在

サンドニ市立ガルシア・ロルカ中学校体育教諭　ファビアン・ファルジュ

はじめに

こんにちは。本日はお越し頂きまして、どうもありがとうございます。特に、この会を企画して下さいました尾崎先生と坂上先生、それから通訳の磯さん[1]に御礼申し上げます。本日、私が頂いた演題は「フランスにおける柔道文化の現在」になりますが、特に 4 つの点についてお話したいと思います。一つ目は、私個人の柔道との関わりについてです。二つ目は、柔道と他の武道及びスポーツの違いについて、三つ目は、フランスでは柔道は何の役に立つと思われているのかということについてです。最後に四つ目は、最近の日本の柔道界をめぐる騒動について、私の意見を述べたいと思います。これらと関連させながら、私が嘉納治五郎師範の著作（フランス語訳）を通じて柔道について学んできたことについても言及していきたいと思います。私の話す内容についてご質問がある場合は、私が話している途中でも構いませんので、どうぞご遠慮無く質問して下さい。

それではまず、私の仕事について簡単に紹介させて頂きます。私は、パリ郊外のサンドニ市にある非常に荒れた公立中学校で体育の教員を務めています。生徒の年齢は（フランスでは飛び級や留年が日本よりも多くあるため）11 歳から 17 歳までになります。教員としてはこの他に、大学の教職課程の体育関係の科目も非常勤で担当しています。このような学校教育とは別に、私は柔道を教えています。場所はパリから 5km ほど北にあり、勤務先の中学校のすぐ隣にあるスポーツ複合施設内の道場です。

フランス柔道に関わる組織は、複数あります。最も代表的なのは、FFJDA と略される「フランス柔道及び関連競技連盟」という組織です。他には、通称で「連合 affinitaire」と呼ばれる、複数のスポーツ種目を組織する連盟です。フランス文化スポーツ連盟（FSCF）の武術部門の育成担当主任と柔道部門の全国担当主任を担当しています。私は現在、フランスの柔道 4 段でして、これから 5 段の昇段審査を受ける予定です。今回の来日の目的の一つは、昇段審査を受けるにあたり、講道館でご助言を頂くことです。

１．私と柔道

このように、私はそれなりに長い期間柔道を続けてきました。その私が柔道を始めたきっかけなのですが、それは子どものときの私にあまりにも社会性を欠いていた時期があり、両親が自制心と社会性を身につけるために柔道をやらせたことでした。ここで「社会性を欠く」というのは、感じが悪い、攻撃的、協調性がない、ということです。柔道を始める前、私はよく殴り合いのケンカもしていました。私に対する柔道の教育効果はてきめんで、私は柔道の価値観をしっかり学びました。柔道では、技術的にもどんどん上達し、成長していくことができました。

私は柔道でチャンピオンになりたいと思うようなりました。柔道は、私にとってはとにかく良い方向に働きました。INSEP[2]（国立スポーツ体育センター）で居合道とレスリングも少し習いましたが、十代の頃は学校の勉強と柔道のことだけ考えていました。山下泰裕さんの柔道には驚嘆しながら見習おうとしていたことが、思い出されます。私は柔道という熱中できるスポーツを見つけたのでした。あるレベルまでは、私は試合に勝つことに喜びを覚えていました。しかし、私にはトップの中のトップになるための才能が足りず、競

技柔道の道を極めるのは途中で諦めました。現在では、中高年の選手を対象にしたヨーロッパ・マスターズ柔道大会に柔道愛好家として毎年のように出場しています。

話が前後しますが、柔道のおかげで、私は少年時代に誤った方向に行かずに済みました。私と同様のことは、当然ながら全ての子どもに起こるわけではありません。柔道にどういう効果があるかは、人それぞれの性格の類に依るところがあります。しかし、柔道の価値が非常に優れていることに変わりはありません。ただし、柔道の稽古は一生懸命にやらないと意味がありません。

２．柔道と他のスポーツの違い

柔道とスポーツの違いは何でしょうか。このことを論じる前に、まずは柔道と嘉納師範の哲学について確認したいと思います。嘉納治五郎は、柔道を教育の方法として、青少年の心身の善用のためになることを望んでいました。1882 年に創始された柔道は、身体の訓練であると同時に自己超克の教育でもあり、日々の社会生活に生かすことのできる有用な価値を伝達してくれる総合的技芸として、構想されていました。嘉納治五郎は江戸時代に続く明治時代の申し子で、近代的な武術[3]を初めて考案して練り上げました。彼によって、柔道は戦闘の手段ではなくなり、人間性に資するものとなったのです。彼は柔道を日本の義務教育で皆に教えることには反対でしたが、柔道は世界中に普及しました。柔道が本格的にフランスに到来したのは嘉納師範の晩年期で、1935 年に川石酒造之助がフランスに来てからでした。

多くの武術は、柔術から派生しています。嘉納師範も柔道を柔術を基に考案しましたが、彼は柔道をスポーツ格闘技としても扱えるようにするため、柔術の中から危険な技を取り除きました。柔道の基本原理とは、以下の相補的関係にある 2 つの要素から成ります。一つは、最大限の効率性です。つまり、エネルギーの使用を最少に抑えつつ、生産的な方法でエネルギーを使おうとすることです。これは、日本語では精力善用と表現されます。もう一つは、助け合いと相互の繁栄を意味する自他共栄です。嘉納師範によれば、人間がそのエネルギーを正しい方向に使い、社会の成員が助け合えば、その集団と社会は調和とともに成り立ち、自然な発展を享受することが可能になるわけです。柔道とは異なり、他のスポーツはこのような原理と社会的賭け金のもとに構想されておりません。後者は、ルールのあるゲームとして作られているだけです。

他の武術の歴史は、特に日本武道のそれは、柔道と密接に関わっています。なぜならば、前者も部分的には嘉納師範の影響を受けているからです。ここでは例えば空手と合気道を想定していますが、これらもまた、身体の修練であると同時に精神性も帯びています。柔道と他の武術の違いは、技術的な面から指摘できます。例えば空手には打撃がありますが、柔道にはありません。合気道は空手よりも穏やかな武術で、相手への攻撃を目的としていません。また、フランスの合気道では昭道館の流派以外は試合を行わず、競技性を排しています。柔道は、攻撃よりも防御に重点があると思います。

柔道よりも新しい他の日本武道も、柔道に一般的な精神を継承しています。したがいまして、柔道と日本武道の違いというのは、根本的なところでは少ししかありません。主な違いというのは、相手を掴めるか否か、打撃が認められるか否か、といった程度になります。

３．柔道の教育的効果について

武士道はもともと、武士[4]の名誉規範を象徴するものでした。それは江戸時代以前につくられ、封建兵の心理的態度と精神的目標に関わるものでした。長い間、そのような武士道の規範は、自己の背後にある死を受け入れ、その痕跡を世の中に残すという考え方に結びつけられてきました。一部の人はそれを誤って解釈し、フランスでは « hara-kiri » と呼ばれる切腹こそが武士道の

精神だと誤解しています。武士道はしかし、命に対して無責任な態度を取ることではありません。その精神は自己犠牲と結びついていますが、これは他者を助け、社会貢献を勧める考え方です。

現在では、武士道の規範は時代の変化とともに昔とは異なった意味で解釈されています。封建時代でも武士の時代でもない現代において、武士道の精神は武術教育の価値体系を支えています。これは、礼儀、勇気、誠実、名誉、謙虚、敬意、自制という、フランス柔道の価値観を支えるキーワードによって表されているものです。

武術は、上達するためには真剣に稽古に取り組まねばなりません。基本動作、反復練習、打ち込み練習、試合稽古は、体力作り、俊敏性の向上、身体の動きの理解などに役立ちます。これらとは別の形で、様々な形式による稽古（掛り稽古、約束稽古、乱取り、試合など）は、攻撃と防御の様々に異なる動きを統合的に習得するのに役立ちます。稽古に取り組む人は練習の際に技術に関する情報を得て、実際の稽古の中でその使い方を覚えていきます。以上のような稽古の究極的な目標は、最小限の努力で最大の効率性を生み出せるようにすることです。

修練での忍耐は、体力の質に加えて精神の質も向上させてくれることを、我々柔道指導者は認めています。真剣に稽古に取り組むことで、門下生は真面目でひたむきな態度を身につけますし、主体的に物事に取り組むようになります。時間をかけて柔道に取り組むという経験は、落ち着き、平静さ、自信に加え、注意力、想像力、良識も身につけることができます。試合に勝ちたいという気持ち、何か手強いものや困難な対象に立ち向かうときの対処、努力の味を知ること、自分のエネルギーを良い方向に使うこと、よく考えて行動すること、感情や怒りから振る舞いを自制すること、以上のことは全て、柔道によって経験できることであると同時に、社会生活の日常にも置き換えることが可能なのです。

同様のことですが、武術[5]は闘争心や忍耐力を発達させるだけでなく、個の理解を通じて敬意を養います。柔道家あるいは武術家一般において、稽古や試合の相手に礼をしないという発想はあり得ませんし、相手が師であれば尚更でしょう。師範は、知識、善行、成長の糧になるものを伝達するわけです。師範も永遠に修行中の身であることに変わりはありませんが、彼らはとても敬われ、場合によっては崇められる存在でもあります。

嘉納治五郎は、柔道の本質を次のように表現しました。「ただ一つの道を歩みなさい。勝利がうぬぼれや驕りをもたらさぬよう、失敗に落胆しないよう、落ち着いて周到になるよう常に心がけねばなりません。嵐がやってきそうなときも怖がってはいけません。」私たちはそれぞれ、柔道の創始者の用いたメタファーを理解できるでしょう。柔道という技芸が心身のディシプリンであり、そこから学ぶことは日常生活の管理にも適用できることを、このメタファーはよく表しています。柔道場[6]の内側と外側の両方で柔道家の人間性を定める要素は 3 つあり、それは心技体です。嘉納治五郎はこれら 3 つを統合しようとしたのでした。

子どもも大人も、自分の人生を組織化する必要があります。つまり、規則を持つ、計画を立てる、目標を持つ、限界を定める、などのことです。さらに、バランスを保つことも必要でしょう。武士道の道徳規則[7]は、このような人生の組織化の良いサポートになるのです。道徳規則の価値観は、長い時間をかけて実践していかない限りは理解できませんし、身につきません。さらに言えば、子どもが道徳規則を学ぶにあたっては、保護者の教育にも支えられる必要があります。

私が 2005 年に柔道クラブを創設した場所は、低所得者層向けの公営団地の並ぶ荒廃した地区の一画にあり、このような地区は「ゲットー」と呼ばれることもあります。ここには、多くの暴力が日常にあります。通訳の磯さんは私のクラブに通ってくれたわけですが、不幸なことに、彼はその地区での教育に伴う困難を存分に知ることになりました。彼はその地区で、二度も暴行被害に遭ったのです。その地区には、銃器、麻薬、殺人などが存在します。あまり想像できないかもしれませ

んが、フランスにもこういう無法地帯があるのです。しかし、私は柔道の価値観の教育を通じてそういう状況を改善できると信じています。

1997 年から、私は柔道場の入っているスポーツ複合施設に隣接する公立中学校で体育を教えています。この中学校のある地区は 700 メートル平米の広さです。この地区は、フランスでも有数の荒廃した地区に分類されており、その状況は憂慮すべき状態にあります。不作法はひんぱんにあります。失業率はきわめて高く、社会的な困窮状態にある人は住民の 4 分の 3 に上ります。住民は皆、質素な低所得者層向け公営団地に住んでいますが、中には大家族で狭い部屋に住んでいる人たちもいます。外国に出自を持つ住民の割合は、9 割に達します。

以前から、多くの青少年はスポーツ複合施設の体育館に「スクウォッター」をしに来ていました。彼らは、友達に会ったり、遊んだりするために来ます。大抵の子はどのクラブや組織とも関係なく来ていて、体育館はたまり場として利用されています。それで私が思ったのは、こういう青少年たちをどうして取り込まないのかということです。その地区のように難しい環境においては、柔道の教育的価値から見て、彼らに柔道をやらせたらいいと思ったのでした。望むべくは、生活の規律や市民的・社会的価値観を身につけてくれることです。

私はこうして、2005 年にその荒れた地区の体育館を使って柔道クラブを運営するという大きな挑戦を始めました。その挑戦は現在、成功しています。私たちのクラブには、150 人近くの仲間がいて、我々柔道指導者はよく知られています。保護者は私たちに信頼を置いて子どもを預けてくれますし、私たちに敬意を払ってくれます。ときには、保護者は私たちがあたかも医者であるかのように助言を求めてくることもあります。このように我々指導者は保護者からの絶対的な信頼を受け、保護者は私たちに、厳格さと基本的な教育を子どもたちに教えるのを任せてくれています。

柔道指導とその教育活動が他のスポーツや文化的活動と全く異なるとは言えません。しかしながら、柔道には、振る舞いや行動を変えるような働きがあります。例をいくつけ挙げてみましょう。稽古や試合の最初と最後にする礼、力を抑えて制御する義務、十分な配慮と制約の下での激しい動き、熟練している者が初心者を助けつつ励ますこと、などです。また、柔道では講師と高段者が模範にならなければなりません。

柔道によってもたらされる価値観は、自然な形の実践として顕れることになります。それは既に言及しましたように、助け合いや不正行為の忌避などです。もちろん、残念なことにこれらのことは時々起きてしまうものではあります。しかし、柔道実践から得られる経験は、特別な教育を受けることなしに、他者に敬意を持って分かち合いながら生きていくのを助けてくれます。このような点は、一般的に武術（日本武道）の長所です。したがって、これは他のスポーツのディシプリンと比べて武術の優れているところです。

私の柔道場があるような荒れた地区においては諸々の差別や男女の不平等と闘うことに柔道の利点がありますし、豊かなスポーツ活動を通じて教育を行うことに利点があるのはもちろんです。ご理解頂けると思うのですが、困難な状況にある地区では、青少年たちに何かやるべきことや情熱を持てることを与え、そういうことに時間を使わせることはとても大事です。柔道クラブの門下生たちに将来設計の重要性を伝えることを、私は重視しています。

暴力のはびこる地区で柔道を教えることにはメリットもあります。少年たちは、格闘やケンカが既に好きだからです。彼らには適切な教育を通じて然るべき方向に導く[8]必要のある攻撃性が多少ありますが、チャンピオンになる資質も備えています。もちろん、チャンピオンになるのは一番の目的ではありません。我々はもちろん、全ての問題を解決できるわけではありません。しかし、皆の人生をより良くするのに、柔道は大いに貢献してくれています。

４．日本柔道について

私にとって、日本柔道とは技術の面で模範であると同時に、格闘の哲学と考え方においても模範であります。日本柔道の教えは、技術的な面で非常に豊かです。日本人は、自他共栄の考え方をしっかりと自分のものにしています。だからこそ、日本人（柔道家）は世界一であり続けているのです。

日本の柔道の練習は勝敗に関係なく行われることが多く､柔道家はパートナーと練習しますが、対抗相手とはしません。日本の柔道では、動作が反対の場合のときでも相手を受け入れます。しかし、ほとんどの国では、力任せのせいで技術を十分に受け入れていません。これは粗野な対立で、戦術的なものです。天理大学教授の藤猪省太さんは 1970 年代の現役時代、練習でよく倒れたり投げられたりしていました。これは、相手のやろうとしていることをやらせるためでもあり、自分の欠点を埋める方法を探るためでもありました。彼はこのように練習をして、何度も世界チャンピオンになりました。フランス人にとっては驚くべきことです。これは正に、shiai（試合）と randori（乱取り）の違いでしょう。日本柔道のような勝敗に関係なく行われる乱取りというのは、他の国ではなかなか受け入れられないと思います[9]。日本柔道は、観るものとしても素晴らしいです。つねに攻撃に向かっていて、力任せではなく技巧的だからです。

私は、日本柔道の組織構造について詳しくありません。しかし、フランスの柔道組織について皆様にお話することはできます。まずは、学校教育における扱いについて。小学校から高校まで、体育の授業で教育省によって定められたプログラムに従って様々なスポーツを教えることになっておりまして、柔道もそのプログラムに含まれています。担当するのは、体育の教員です。体育の授業の限られた時間ではありますが、フランスの子どもは柔道を義務的に習うことになっています。

体育の授業とは別に、アソシエーションの活動があります[10]。アソシエーションは私的な団体として作られていますが、私の場合も同様です[11]。柔道関係のアソシエーションは全て、フランス柔道（及び関連競技）連盟に属します。フランスには 6,000 ほどの柔道クラブがあり、それらは各地に散らばっています。誰もが柔道を知っていますし、65 万人もの柔道家がいます。これは、人口の 1%に相当します。柔道関係の組織は、全国レベル、地域レベル、県レベル、都市レベルで異なっています。

帯の種類もいくつかありまして、柔道技術の習熟度によって帯の色を変えています。この方法を考案したのは、川石酒造之助師範です。帯の色は習熟度の順に、白、黄色、オレンジ、緑、青、茶、黒、となっています。黒からが有段者です。フランス柔道連盟では、帯の色をさらに増やそうという議論があります。なぜかというと、上達したらすぐに帯の色を変えたいという子どもが多いからです。日本の帯はたしか、白、茶、黒の 3 種類しかなかったと思います。

私は、強い柔道家ほど偉いという考えには全く与しませんが、このことは日本柔道の精神にも表れていると思います。例えば、日本の柔道には、技術的に弱い相手に配慮したり、自分を相手にわざと投げさせたりしながら稽古をする習慣があります。ヨーロッパでは、柔道の弱い人に対する配慮は十分ではありません。弱いと投げられてばかりになってしまい、柔道がつまらなくなってしまいます。こういう状況は良くありません。自分よりも弱い人に配慮するというのは、柔道精神の基本の一つだと思います。

さて、日本柔道の話をする前に、私の日本での逸話を一つ紹介したいと思います。私が初めて日本を訪れたときの出来事なのですが、東京の講道館を探していたときに大変驚かされました。それは､複数の人に講道館の場所を聞いてみたところ、誰もその場所を知らなかったのです。日本柔道を理想化していた我々にとって､これは衝撃でした。1 万キロも離れたところから講道館を訪れようとしているフランス人がいるというのに、講道館と

同じ街にいる日本人がその場所を知らないなんて。こんなことはあり得るのだろうかと思いました。

それでは、最近問題になっている全日本の園田監督の話題に移りましょう。彼は竹刀で女子選手を叩いていたらしいのですが、まず間違いないのは、こうした暴力行為は人々に非常に悪い印象を与えるということです。特にオリンピックのチームというのは柔道の模範であり、若い柔道家が同一化しようとするわけですから、尚更です。この事件がさらに残念なのは、日本の高校生がバスケットボール部の体罰で自殺した事件のあった直後に起きたことです。もし園田さんがフランスで同様のことをした場合、彼は柔道界と教育界を永久追放の処分になるでしょう。フランスではそれだけ、体罰に対する扱いが厳しくなっています。

私は柔道を 34 年間続けていますが、柔道指導者が暴力を振るったという話は聞いたことがありません。柔道の指導にしばしば困難を覚えることがあるにしても、です。最近、下村文科相が体罰の根絶を訴えたと聞いていますが、フランスでは大臣の口からそのような発言が出ること自体が想像できません。2011 年のある調査によると、平均して毎年 4 人の子どもが柔道の事故で亡くなっているようです。遺族の会も結成されたと聞きました。こういう話は、日本柔道の悪評を広めることにしかなりません。柔道と暴力が結びつくのは当然悪いことですし、嘉納治五郎の思想にも反しています。しかし、日本柔道はこのような状況を改善していくと信じています。日仏の差異をまた一つ挙げるならば、仮にフランスで柔道関係者が同様の暴力事件を繰り返した場合、フランスでは柔道は社会的に受け入れられなくなり、存続できなくなることです。日本柔道は、度重なる暴力事件にもかかわらず存続しています。これは、日仏間での大きな違いです。

結びにかえて

日本柔道に関して心配されていることの一つとして、国際大会での成績が下がっていることがあるかと思います。これはしかし、柔道の国際的普及とともに柔道の国際的パワーバランスが変化したということであって、日本柔道が衰退していることを意味しません。問題は、国際大会での成績以外のところに見るべきかもしれません。油屋康さんという柔道家が講道館に対してビジネスに走りすぎていると批判したという話を聞きましたが、その通りかもしれません。

フランスの例を一つ取り上げてみたいと思います。去年、フランス柔道のユース代表チームが練習のために来日したのですが、彼らは初日に東京で万引事件を犯してしまいました。それからのフランス柔道連盟の対応が速かったのですが、翌日にチームのメンバー全員を翌日フランスに強制帰国させました。その後、事情聴取を行った上でスポーツ裁判にかけられ、彼らは 1 年間の公式試合の出場停止とフランス代表としての練習の禁止処分を与えられました。フランス柔道連盟は、規律に対する敬意を欠いた行為に対しては、迅速かつ厳格に対応しています。

嘉納治五郎は、最初の近代的武術を創り上げました。その目的は、勝つために闘うことでもお互いが争い合うことでもなく、人間性（人道）に尽くす者を育てるようにすることでした。自他共栄という基本理念とともに、彼は柔道の普及のために彼の人生と才能を捧げることを惜しみませんでした。柔道の教育的価値は、そのような理念とともにあります。そのような価値なくして、柔道が今のように存在することはなかったでしょう。その価値に統合されようとしない者、その価値を理解しない者、そういう人たちは柔道家ではないのです。

【講演者プロフィール】
パリ近郊出身。パリ第 10 大学で体育教育を学んだ後、中学校の教員になる。現在、パリ郊外サンドニ市のガルシア・ロルカ中学校で体育教諭として教鞭をとり、大学でも非常勤講師を務めている。2005 年以来、勤務先の中学校の近くで柔道クラブを運営している。

【注】

[1] 講演会で通訳を担当した磯が翻訳も担当しているが、この翻訳は読みやすさを重視して部分的に抄訳と意訳を採り入れた。なお、ここでの註釈は全て訳註である。
[2] 「インセプ」と発音する。スポーツ選手とスポーツ指導者のためのトレーニング・センターと学校を備える「国立スポーツ体育センター」の略称。
[3] フランス語は « art martial »である。この語は「マーシャルアーツ」と同じ意味だが、スポーツ格闘技(sports de combat)とは峻別される。前者ではどちらかというと中国の武術や日本武道のような「東洋」的なものが想定されているのに対し、後者ではボクシングやレスリングなどの「西洋」的なものが想定されている。フランスでは柔道が武道としてもスポーツとしても普及しているため、両方に分類される。 ファルジュ氏の« art martial »の用法は少し曖昧なため、私は文脈によって「武術」と「日本武道」を訳し分けた。
[4]元のフランス語は samouraï であるが、日本語の「侍」とは意味が異なるため、訳語は「武士」とした。
[5] ここでは、講演者は柔道を中心とする日本武道を想定している。
[6] フランス語では、畳から派生した tatami が講演者の用いた表現である。これは、柔道場の中のさらに柔道をする場所のことである。
[7] 1960 年代以降のフランス柔道の理念は、嘉納治五郎の思想に加え、新渡戸稲造の『武士道』の思想によって支えられている。その理念の重要な要素が、礼儀、勇気、誠実、名誉、謙虚、敬意、自制というキーワードによって表される道徳規則(Le code moral)である。
[8] 「然るべき方向に導く」のフランス語は、canaliser という言葉である。この単語には canal（運河）が含まれているように、河川を工事して水の流れを一定の方向に向かわせるという意味がある。フランスで柔道の意義を柔道関係者に聞くと、子どもを canaliser するのに良いという意見が多い。この場合の canaliser とは、子どものエネルギーや意欲を抑圧するのではなく、それを規律と自制をもって然るべき方向に向かわせようとすることを意味している。
[9] ここは意味が分かりにくいかもしれない。講演者が言わんとしていることは、フランスの柔道家はふつう、相手と組み合うときは勝敗を強く意識するということである。つまり、技の反復練習でもなければ、相手にわざと投げさせるような器用さはないし、そもそもしたくもないという発想がフランスでは一般的なようである。
[10] 日本と異なり、フランスでは部活動というものが存在せず、学校の課外活動への関与は非常に限定的である。したがって、日本の部活動に相当するものはアソシエーションなどで趣味や習い事として行われ、学校教育とは切り離されている。
[11] 講演者は体育教師であると同時に柔道クラブも運営しているが、これは日本の中学校で教員が部活動を指導するシステムに似ている。しかし、講演者の務める中学校では、60 名以上いる教員のうち講演者のみが、子どもにスポーツを教えているそうである。

（翻訳：　磯　直樹）